

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2014.02) 14巻1号:123~125.

旭川医科大学回顧資料(15)昭和62年度
下田晶久教授が第3代学長に就任

藤尾 均

下田晶久教授が第 3 代学長に就任

昭和 62 (1987) 年度の出来事を回顧してみよう。

年度初日にあたる 4 月 1 日、日本国有鉄道 (国鉄) が 110 余年の歴史に幕を閉じて分割・民営化され、J R 東日本など 11 法人および国鉄清算事業団が発足した。一方、自動車交通網の面では、9 月 9 日に東北自動車道・首都高速道路が連結し、青森・熊本間 2000 余キロが完通した。

5 月 3 日、兵庫県西宮市の朝日新聞阪神支局に覆面男が侵入し発砲、記者 1 人が死亡し 1 人が重傷を負った。憲法記念日に起きた、暴力によるこの言論封殺事件は、「言論の自由」を謳う憲法への重大な挑戦として、朝日新聞社だけでなくマスコミ界がこぞって犯人検挙に向けた大キャンペーンを展開した。しかし、犯人もその背後関係もいまだに不明である。

7 月 29 日、東京高裁は、ロッキード事件の被告である田中角栄元首相らの控訴を棄却した。被告側は直ちに最高裁へ上告した。それに先立つ 7 月 4 日、自民党田中派の重鎮であった竹下登は、すでに田中派の面々の多くを従えて「経世会」を結成していた。事実上の派閥「竹下派」の結成であった。キングメーカーとも言われ隠然たる実力を保持していた田中角栄も、こうしてその影響力を徐々に退化させていった。

10 月 19 日、すでに 5 年近くにわたって自民党総裁の座にあった中曽根康弘が、自民党の 3 人の実力者である竹下登・安倍晋太郎・宮沢喜一の中から竹下を次期総裁に指名、これを受けて 31 日の臨時党大会において竹下が総裁に決定し、11 月 6 日に召集された臨時国会において竹下内閣が成立した。

それに先立つ 9 月 18 日、宮内庁は昭和天皇の腸疾患を発表した。同 22 日、天皇は宮内庁病院に入院し手術を受けた。同日の閣議では、国事行為は皇太子明仁が代行することが決められた。10 月 25 日、皇太子は天皇の名代で沖縄国体に出席した。今にして思えば、昭和はすでに 1 年余を残すのみとなっていたのである。

この年は史上空前の株価乱高下の年でもあった。1 月 30 日には初の 2 万円台を記録していた日経平均株価であったが、10 月 20 日にはニューヨーク市場暴落を受けて 3800 円を超える過去最大の下げ幅を記録した。しかし翌 21 日には反騰し、2000 円を超える最大の上げ幅となった。

11 月 29 日には、大韓航空機がミャンマー上空で突如として行方不明になった。数日後にバーレーンで逮捕され韓国に連行された北朝鮮の金賢姫 (キム・ヒョンヒ) が、翌昭和 63 (1988) 年 1 月 15 日、金正日の指令で同機を爆破したことを自供した。

医学関連の話題に目を転じると、最大の朗報としては、10 月 12 日に利根川進博士に日本人初のノーベル生理学・医学賞が授与されたことが挙げられる。とはいえ同博士がアメリカのマサチューセッツ工科大学の教授であったため、手放しで快哉を叫ぶ声のほか、日本人の頭脳流出を残念がる声や、アメリカの研究環境をうらやましがらる声などもマスコミを賑わせた。他方、9 月 22 日には、厚生省 (当時) の研究班が、血友病患者の 38.8% が輸入血液製剤でエイズ感染しているというショッキングなデータを発表した。この大規模感染は、ほどなく「薬害エイズ」として刑事事件にまで発展することになる。

文化面では、「時代の波」を意識させられた出来事として、大正時代に澤田正二郎によって旗揚げされ一世を風靡した劇団「新国劇」が、人気低迷のため辰巳柳太郎・島田正吾の提案により 9 月 7 日の総会で 70 年の幕を閉じたことが特筆される。

この年の流行語には、映画「マルサの女」(伊丹十三監督) が一躍有名にした、国税局査察官を指す語「マルサ」のほか、「目が点になる」「ピンポン」などがあつた。流行歌では、「命くれない」(瀬川瑛子)、「雪国」(吉幾三)、「無錫旅情」(尾形大作) などがヒットし、演歌が最後の煌めきを示した年であった。映画では「マルサの女」を

はじめ、「ハチ公物語」などがヒットした。

年が改まった1988（昭和63）年の3月13日には、世界最長53.9キロメートルを誇る海底トンネルである青函トンネルが開通している。

さて、この1987（昭和62）年度に我が旭川医科大学では、7月1日付けで第3代学長が誕生した。1949（昭和24）年に北大医学部を卒業し、同助手・講師などを経て、1973（昭和48）年に旭川医大が開設された当初から病理学第一講座教授を務めていた、下田晶久氏である。

今回の回顧資料として挙げるのは、学長就任当初に広報誌「かぐらおか」に掲載された、「就任にあたって」と題する文章である。冒頭部で下田学長は本学を、「最早“新設医大”の域を脱して、言わば青年期に入った大学」と位置づけている。この文章中で、「全国的な医師過剰の予測が明確となり、養成数の通減が打ち出された今」という表現に出逢う。誰しも「隔世の感」を禁じ得ないであろう。

（旭川医科大学 歴史・哲学 藤尾 均）

＝回顧資料＝

就任にあたって

学 長 下 田 晶 久

黒田前学長の任期満了ご退官の後を受け、第3代学長として、卒業生累計897名、大学院課程博士57名を送り出した旭川医科大学を、7月1日付けでお預かりする事になった。思えば昭和54年春、初めての卒業式に社会の耳目が集まり、同時に大学院が開設されて初の入学者10名を迎え入れた頃の事は、副学長として初代山田学長のお手伝いをする立場にあった為か未だに記憶に新しい。その頃に較べると現在の旭川医大は、上記の数字を見ただけでも最早“新設医大”の域を脱して、言わば青年期に入った大学と言えるであろう。ここに至るまでに関学以来13年余りの月日が経っているが、その間に払われた教職員・同窓生、学生等全ての人々の努力の賜物として本学の今日がある事を思う時、一層の発展を期して舵取りさせて戴く重責を痛感する次第である。

一般に学問の府としての大学には、研究と教育と言う二つの機能が求められている。研究には、時流に左右されない純粋な学理の追求から、その時代々々における社会の要請に直接応える研究まで選択の幅は広い。これらの研究活動にも必然的に、次の世代を担う人材を育てる教育行為が含まれていることは言うまでもない。一方、狭義の高専教育機関と位置付けられる大学の教育は、学生に職能を身に付けさせる専門教育を目指している。戦後我が国の社会の高等教育志向がもたらした大学の急増が、今ようやく反省期を迎え、大学の自己評価を求める声が高まって来た。評価の基準は何かと言う事になると論議の多いところであろうが、本来大学が備えるべき二つの機能のそれぞれについて問うと同時に、両者の均衡の程度も問われなければなるまい。加えて医科大学の場合は、教育・研究に欠かせない附属病院が即地域住民に開かれた医療提供の場となっており、日常の診療行為も亦評価の対象となる。そうして終局的には、卒業生一人々の活動に現れる成果こそ最も重要を評価対象であろう。

言い替えると、大学の知的生産には、学問的成果や技術開発と共に、専門的能力を備えた人作りがあると言えよう。医科大学の場合は特に後者を大切に考えなければなるまい。それは卒業までに6年間、研修医として2年間、さらに2・3年の経験を積んで初めて独り立ちするのが医師の一般的なコースであり、新鮮な感覚と情熱を抱いて入学する若人の多くが、多感な青年期の十年余りを過ごす場となっているからである。孟母三遷の故事に倣つ迄もなく個人の生い立ちはその環境に左右される処が大きい。医師は、疾患そのものを対象とするに留まらず、疾患を持つ患者を全人的に癒やさねばならない。それに相応しい人間性を培う場が医科大学である点に思い

を致すとき、その環境作りの重要性が浮かび上がって来る。

他方、旭川医大を取り巻く外部環境の一つに北海道の医療事情がある。この地に新設が決定した要件の一つであった道北地方の医療過疎もこれに含まれる。医師養成に要する年月を思えば、未だ々々求めに応ずる人材を貯えるには至っていないと考えられるが、少なくとも総合的な医師配置のルール作りに、本学も積極的に参画すべき時期に来ていると思われる。大学の側からは、卒後教育の延長線上に据えるべき問題でもあろう。これにはもとより道内他大学との密接を連携が必要であり、簡単な事とは思われないが、全国的な医師過剰の予測が明確となり、養成数の通減が打ち出された今と成っては、道民の不安と苛立ちを和らげる施策の一翼を担う為にも急がねばなるまい。

“青年期の大学”それは何と快い響きを持つ言葉であろう。未来に向けての無限の可能性を感じさせる。しかし、同時に未熟さを容認する表現でもある。その明るい未来は、これまでに築き上げられた土台の上に着実を思考と行動を積み続ける、現在の努力があって初めてもたらされる事を銘記したい。創設期の本学キャンパスには重粘土が露出し、植樹も緑化も容易に受け付けられない劣悪を地質との対応に悩まされて来たが、努力の甲斐あって近頃ようやく樹々に生長の兆しが見え始めた。自然環境でさえ、工夫と努力によって改善出来る事例を身近に体験した今、学の内外を問わず教育・研究・診療上の環境整備を、教職員各位をはじめ同窓生諸氏と共に精一杯進めて行きたいと願うものである。学生諸君もどうか日々の充実を志してこれに応じて戴きたい。